

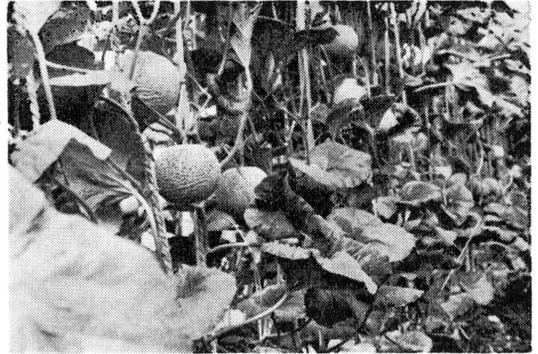
稲単作地帯にのびる

ハウスメロン (1)

秋田県農産普及課・専門技術員

須田 雄 悦

簡易施設でのメロン栽培



1. 「秋田メロン」の歴史

最近東京中央卸売市場年報に、アールスメロで「秋田メロン」の銘柄が出るようになった。本県において、本格的にハウスメロンの導入が検討されたのは、昭和35年頃からで、発想は、当時水稲の健苗育成を目的につくられたビニールハウスの、夏期利用から始まっている。

無加温ハウスで栽培する時期が、ちょうど水稲作業と競合しないことから、年々作付面積が増加し、本年は15,000ケース以上の出荷が見込まれている。

このように出荷量はまだ少ないが、市場的立場づけとしては、愛知県の7~9月の夏メロンの後に出荷されるので、市場での競合も比較的少ない。

また、経営的には静岡、愛知、千葉県のように、高度の輪作体系の中でのメロン栽培ではなく、極く簡単な施設を利用した夏場の表作が多いこと、無加温で栽培できる期間だけを利用していることが特徴である。

2. 栽培型の推移

当初ハウスメロンを導入した地域は、水稲単作地帯で、しかも稲の健苗育成を目的につくられたビニールハウスの、高度利用が目的であったので、採用する栽培型は稲作との競合の最も少ないもの、無加温ハウスで栽培できること一の2つの条件を満すことが要件とさ

れ、(表一2)の早まき型が一率にとり上げられ、田植後から稲刈まで、一作を終える栽培型が主体であった。気象的には17°C~25°Cの間で栽培され、収穫物も果形・糖度も安定したものであった。

以後、昭和42年頃から普通まき作型が一部の農家により試作され、10月出荷を試みたが、市場において他産地との競合の少ないこと、高価に販売できることが確認され、平均気温12°C~25°Cの幅で無加温栽培ができ、早まき作型に劣らない高品質のものが生産された。その後この作型は海岸地帯、県南地帯を中心に導入されている。

また一昨年頃から、9月出荷のメロンと10月出荷のメロンの価格差が大きくなったことから、本格的に10月出荷作型が検討され、沿海温暖地において、おそまき型である6月下旬まき、10月中~

表一1 秋田県におけるハウスメロン栽培の推移

年次	栽培面積	植付本数	出荷数量	売上金額	1箱当り価格
昭40	3,119m ²	10,130本	1,059箱	1,742,100円	1,645円
41	4,640	14,899	1,765	2,367,700	1,341
42	13,438	32,779	4,044	8,066,200	1,997
43	19,516	49,032	5,292	6,926,500	1,309
44	27,475		7,310	12,284,800	1,407
45	39,615		9,317	16,923,300	1,816

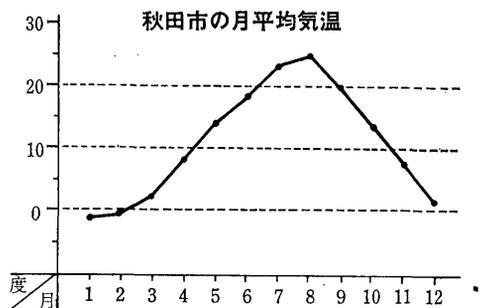
下旬どり型が導入され、10°C~25°Cの平均気温の

表一2 主要栽培型

栽培型	月日	作業名	種子消毒	鉢上げ	定植	支柱立	第一回追肥	支柱立	主枝摘心	(置土)	交配	摘第一回追肥	玉一つ摘み	(置土)	ネット出始め	第三回追肥	ネット最盛期	ネット完成	水きり	収穫
早まき型	月	日算	6/18	6/24	7/12~7/16	7/21	7/25	7/31	(8/4)	8/8~8/11	8/15	(8/20)	8/21	8/24	9/9	9/13	9/22			
	日	算数	0	6	24~28	33	37	43	(47)	51~54	58	(63)	64	67	82	87	96			
普通まき型	月	日算	6/23	6/29	7/17~7/21	7/26	7/30	8/5	(8/9)	8/16~8/18	8/22	(8/26)	8/30	9/6	9/24	9/30	10/9			
	日	算数	0	6	(24~28)	33	37	43	(47)	54~56	60	(64)	70	76	90	96	105			
(おそまき型)	月	日算	6/27	7/3	7/23	7/30	8/3	8/9	(8/13)	8/20~8/22	8/26	(8/30)	9/3	9/12	10/1	10/8	10/17			
	日	算数	0	6	26	33	37	43	(47)	54~56	60	(64)	70	78	93	100	109			

もとで、全く無加温か、後期若干の温風加温で、高品質のメロンを収穫できる域に達した。

本県において、メロン栽培に用いているビニールハウスの型式は、パイプハウスに換気窓のついたものと、雨屋根型鉄骨ハウスであるが、簡単なパイプハウスでも、換気装置さえ備えていれば充分栽培できるようである。



3. 栽培の省力化

本県のハウスメロンの作業体系は、稲作との競合を極力さけるように設計されているが、栽培規模拡大上のネックは、なんといっても床土の入替え作業である。

導入当初は、山の赤土と田土を運んで混合して栽培したが、規模拡大にともなってハウスを水田に建て、水田の土をそのまま床土に利用するか、砂丘地の場合、砂に松葉等を混合して栽培する例も多くなった。

最も省力化された方法は、春ハウスに水を入れ代掻きをして、折衷苗役を作り、田植後ハウス内の排水をはかり、ベッド幅の仕切をつくり、その上にビニール、わらを敷き、うね間の溝土をベッドに上げ、床土にする様式にまで進んだ。

しかしこの場合、残留する窒素量の相違から、一率に施肥量をきめることが困難なため、この点問題として残されている。

一方、県内本荘普及所においては、床土栽培について総合普及指導園を通じ、接木栽培により連作害を軽減する課題にとり組んでいて、すでに

表-3 収穫時における生育調査および収穫物調査

項目 試験区	収 穫 時 (10月1日)																		
	収			穫			時			果 径				糖 度		肉 の		ヒ ャ ッ	
	莖長	展開葉数	平均節間長	最大葉 タテ	ヨコ	莖径	交配 月日	着果 節位	果重	タテ	ヨコ	糖度	ネット 高低	粗密	肉の 厚さ	肉質	ヒ ャ ッ の高低	皮色	
園試標準液	157.5	24.0	6.6	18.5	26.9	1.1	8.16	13.3	1170	12.5	12.5	12.5	なし	密	3.5	良	なし	淡	
園試2倍液	152.4	24.0	6.4	19.4	26.8	1.1	8.16	14.7	1200	13.0	13.0	13.0	なし	密	3.7	良	なし	淡	
園試3倍液	158.6	24.0	6.4	19.2	28.3	1.2	8.16	14.4	1240	12.5	13.0	13.0	なし	密	3.8	良	なし	淡	

かなりの成果を収めている。

次にこの間、省力化を目的に行なわれた農業試験場の成績、並びに普及所において調査研究された主なものを紹介する。

1) もみがらくん炭栽培の実用化(農 試)

毎年、床土の入替えには莫大な労働力を必要とするうえに、同じ水田の土壌を用いても、高位収穫田では窒素の発現が異なるため、施肥量については、初心者にもできるような一率の基準をつくるのが困難で、農家の勘にたよる場合が多い。

この問題を解決するため、搬入の楽なもみがらくん炭を培地に用い、液肥を用いて施肥技術の画一化をはかるための一連の試験を行なっており、昭和43年にはくん炭培地に、人工堆肥1株当り40gを混入し、肥料は園試標準培養液にEDTA-Fe 5ppmを併用して、標準培養液、P₂O₅1.5倍液、K₂O1.5倍液、Mg1.5倍液の4区で実験を行なった。その結果節間長、葉数、葉幅等には大差がなく、収穫物については、園試標準液の果実重1.2Kgに比べ他の各区は大き目の果実になり、増量区間ではP₂O₅1.5倍区>Mg1.5倍区>K₂O1.5倍区の順にまさっている。

品質については、糖度は13°程度で、土耕に劣らない甘味であった。外観はネットも密で盛り上りも良好であった。なお培養液の生育時期別収穫物に及ぼす影響は、前期1/2区、中期1/2区と、前期1/3区、中期2/3区が良好であった。

2) 生育の時期別養分吸収(農 試)

もみがらくん炭を培地にし、液肥を用いて生育の時期別養分吸収量について、前記4区を用いて試験を行なった。

その結果各区ともNとK₂Oは、ネット発生始頃をピークに以後は吸収がおとろえ、特にネット完了以後は急激に低下した。P₂O₅、K₂Oについては、ネット完了以後にも吸収のピークがみられ、生育末期まで吸収されるものと思はれる。特に燐酸、加里、苦土は品質に及ぼす影響が大きい。

(43. 秋田農試)